

國學院大學学術情報リポジトリ

オーストリア＝ハンガリー帝国下の一学校教師：
イヴァン・ツァンカル『マルティン・カチュール』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-20 キーワード (Ja): ツァンカル, ウィーン, オーストリア, スロヴェニア, マルティン・カチュール キーワード (En): 作成者: 宍戸, 節太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000036

オーストリア＝ハンガリー帝国下の
一学校教師
—イヴァン・ツァンカル『マルティン・カチュール』

穴戸 節太郎



リュブリャーナ城
(2019年9月、撮影筆者)

イヴァン・ツァンカル (Ivan Cankar, 1876-1918) 『マルティン・カチュール——ある理想主義者の生涯』 („Martin Kačur. Življenjepis idealista“, 1906)¹は、ツァンカル6作目の長編小説である。小説の舞台

¹ Ivan Cankar: Martin Kačur. Življenjepis idealista. In: Ivan Cankar: *Zbrano delo. 14. Martin Kačur / Smrt in pogreb Jakoba Nesreče / Aleš iz Razora*. Glavni urednik Anton Ocvirk. Knjigo pripravil in opombe napisal Dušan Moravec. Ljubljana (Državna založba

は、世紀転換期へ向かう 19 世紀のオーストリア＝ハンガリー帝国。激動の時代を生きる若き学校教師、マルティン・カチュールは、スロヴェニアの啓蒙に情熱を燃やす自由主義者である。新たな任地で彼を待ち受けるものはただし、人々の反発と無理解であり、苦悩するカチュールは、酒におぼれて挫折する。

『マルティン・カチュール』は、2006 年刊ドイツ語訳カバー袖の紹介によれば、「現代スロヴェニア文学の傑作のなかでも、最も多くの人に読まれ」²、また「スロヴェニア以外でも、最も有名、かつ最も多く翻訳された」³作品であるという。出版からほぼ遅れることなく、1907 年にはフィンランド語に訳され、以後もセルビア・クロアチア語、イタリア語、マケドニア語、ロシア語、ドイツ語、ハンガリー語に翻訳されている。1983 年には、トリエステの作家フルヴィオ・トミツァ (Fulvio Tomizza, 1935-1999) の手で、イタリア語からドイツ語に訳され舞台化され、ツァンカルの『理想主義者』 („Der Idealist“, 1983) が、ウィーン、フォルクス劇場秋シーズンの幕開けを飾った。盛況とは行かなかったものの、⁴次に千田善が述べる、スロヴェニアとスロヴェニア語が占める地理的、言語的位置を考えれば、画期的な初演だったと思われる。

ウィーンから見れば、スロヴェニアはたんなる旧帝国の辺境、田舎にすぎず、「支配者」の側からの断片的な記録が残っているにすぎません。一方、ベオグラードから見てもやっかいなことに、スロヴェニア語は、ユーゴスラヴィアの 8 割で使われる「セルビア・クロアチア語」(連邦崩壊後は別々の言葉とされています) とは発音も文法

Slovenije) 1970. S. 5-152.

本書からの引用は以下、本文中に頁数を付記して引用する。

² Ivan Cankar: *Martin Kačur. Lebensbeschreibung eines Idealisten. Roman.* Aus dem Slowenischen übersetzt, und mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2006.

『マルティン・カチュール』からの訳出に際しては、原語のスロヴェニア語に加え、上記ドイツ語訳を参照している。

³ Ebd.

⁴ Vgl. Erwin Köstler: Nachwort. In: Ivan Cankar: *Martin Kačur.* S. 215-230. S. 230.

もかなり異なり、翻訳・通訳が必要でした（実際に連邦議会には同時通訳があり、テレビ映画にも字幕がつけました）。⁵

歴史的にスロヴェニアとスロヴェニア語が置かれてきた、特異な文化状況が垣間見える。1986年には、イタリアの週刊新聞『エウロペーオ』（„Europeo“）紙上で、『マルティン・カチュール』は、数ある小説のなかから「ヨーロッパの長編小説1906年」に選出されている。⁶

1994年以降、ツァンカル作品の多くのドイツ語訳を手掛けた、E・ケストラー（Erwin Köstler, 1964-）は、「ツァンカルは、彼の政治的な著作、演説、講演において、ハプスブルク君主国最後の数十年の、精確な観察者として姿を現す」⁷と言う。一方でツァンカルは、生涯にわたって、文芸作品、とりわけ散文によるスロヴェニア語表現の可能性を模索し続けた。ツァンカルの作品については、「象徴主義的、印象主義的手法を用いた、自然主義」⁸といった、時代の様式概念からの議論も見受けられる。ただし、ツァンカル自身は、鼻の上の眼鏡よろしく手に創作論を振りかざし、品定めする批評家たちを憎悪し、彼らの規範的批評の退屈さに辟易している。⁹本稿では、イヴァン・ツァンカル『マルティン・カチュール』を、学校教師カチュールの生きた時代のなかに読み解きつつ、ツァンカル作品の文学性の一端を探っていく。

⁵ 千田善「訳者あとがき」（ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル『スロヴェニア』（千田善訳、白水社、2000年）179～185頁所収）180頁。

⁶ Vgl. Erwin Köstler, S. 230.

⁷ Erwin Köstler: Politik & Nation. In: Ivan Cankar: *Materialien & Texte*. Zusammengestellt und aus dem Slowenischen übersetzt von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2000. S. 18-29. S. 18.

⁸ Janko Ferk: Lebenslauf eines Idealisten. In: *Die Furche* vom 18. Mai 2006. Auf: <https://www.furche.at/kritik/literatur/lebenslauf-eines-idealisten-1268365>, 18. Mai 2006. (2022年10月6日最終閲覧)

⁹ 拙論「スロヴェニア・モデルネの誕生——イヴァン・ツァンカルのウィーン」（國學院大學『國學院雑誌』第121巻第6号、2020年、1～19頁）13頁以下参照。

1. 「ターボル」運動と自由主義

『マルティン・カチュール』は、計3部から構成され、第1部がザポーリエ (Zapolje)、第2部ブラートニ・ドウ (Blatni dol)、第3部ラーズィ (Lazi) と、それぞれカチュールの新たな赴任先が舞台となっている。

第1部は、カチュールとともにザポーリエに向かう、郵便馬車を待つ医師ブリナールとのやりとりから始まる。カチュールの口から、彼にとってザポーリエが2番目の任地であり、前任地コトリーナ (Kotlina) で、彼が政治的志操をもとに民衆を教化、教育しようと試み、左遷されるにいたった経緯が語られている。ザポーリエに暮らす、年長のブリナールが、カチュールに語りかけている。

「信じられますかな、まだ10年も前には、私はターボルの、なかなかの弁士だったものですよ。我々の民族の権利のために、戦っていました」。

„Ali si morete misliti, da sem bil še pred desetimi leti velik govornik na taborih? Da sem se boril za naše narodne pravice?“ (S. 8)

「友よ、私もかつてはターボルに出かけたものです。そしてスロヴェニア民族の権利について語りました。けれどもあの頃の私はまだ若かった。いまわかっているのは、この活動のすべてが、私にも他の者たちにも、それほど多くをもたらしやしなかった、ってことです」。

„Tudi jaz sem hodil nekoč po taborih, prijatelj, in sem govoril o pravicah slovenskega naroda. Ampak takrat sem bil mlajši in zdaj vem, da vse tisto delovanje ni zaleglo ne meni in ne drugim niti toliko.“ (S. 13)

ブリナールはカチュールに、市長の機嫌を損ねるのが危険であり、さら

に危険なのが司祭の機嫌を損ねること、神を侮辱すればその報いがあり、司祭を侮辱すれば左遷の憂き目に遭う、民衆について言えば、彼らの邪魔をしないこと、それが肝要であると説いている。

ブリナールが感慨を込めて語る、「ターボル」(tabor) とは何であろうか。

「ターボル」は、スロヴェニア語で「キャンプ、野営」¹⁰を意味する。「ターボル」は、野外での民衆集会を表すチェコ語の名称、*tábor* に由来し、スロヴェニアではとりわけ、1868年から71年にスロヴェニア各地で開催された、一連の政治的、文化的な大衆集会で知られる。「これらの集会は、行政および文化的自立をともなう、統一スロヴェニアを求める要求を下支えし、今日のオーストリア、イタリアといった2言語地域においては、次第に民族間、また当局との間に軋轢を生み出した」¹¹という。1869年5月17日、リュブリャーナで開催されたターボル最大の集会には、3万人にもものぼる人々が参加している。¹²

『マルティン・カチュール』は、自由主義的ターボル運動から間もない1880年頃に始まる、おおよそ20年ほどの時間を描いている。¹³ザポーリエに到着したカチュールは、ブリナールの助言もあり、市長、司祭、校長と、まずはそつなく挨拶を済ませている。しかしカチュールは、日曜日に教会にも行かず、ほどなく近郊の飲み屋の娘ミンカに熱を上げる。

「あいつ、だって、一ぺんだって、ミサにいたこたあねえぞ!」、通りすがりに農夫が言った。

「あの人、スイタルンところで、よろしくやってるんだって。そっちの方が居心地がいいんでしょ!」、女が答えた。

農夫が笑った。

「どうかこやつに罰をお与え下さいまし!」。

¹⁰ 金指久美子『スロヴェニア語日本語小辞典』(大学書林、2009年)414頁。

¹¹ Erwin Köstler: Anmerkungen. In: Ivan Cankar: *Martin Kačur*. S. 231. Anm. zu S. 7.

¹² Vgl. Ebd.

¹³ Vgl. Erwin Köstler: Nachwort. S. 222.

„Saj še pri maši ni bil!“, je izpregovoril kmet, ki je šel mimo.
„Pri Sitarjevih se ženi, pa hodi rajši tja!“, je odgovorila kmetica.
Kmet se je zasmejal.
„To kazen bi mu privoščil!“ (S. 34)

カチュールはミサを終えた人々から、好奇の目を向けられている。
にもかかわらず、カチュールは、医師ブリナルの忠告も無視して、
またもやここで啓蒙活動を開始する。人々が広く書に親しみ、教養を養
うよう、「読書・教養クラブ」(bralno in izobraževalno društvo, S. 37)
を立ち上げようと、飲み屋に農夫や職人たちを集めて、一席をぶつ。

「一つのことがとりわけ必要です。学ぶこと、教養です！私はそう
考えますし、誰もそれをぐらつかせることなどできません。私たち
の不幸、すべての原因は無知です。愚かで、まるで動物のように偏
狭で、粗野なのです。だからスロヴェニア人ほど不幸な民族は、ほ
かにないのです！」。

„Eno je nadvse potrebno: učenje, izobraženost! Jaz sem te misli
nobeden mi je ne more omajati, da je vse naše nesreče vzrok
nevednost, neumnost, živalska zabitost in surovost. Zato nobeden
narod ni tako nesrečen kakor slovenski!“ (S. 42)

「国の命令で読むことを学ぶ。教会で居眠りせず起きているとき、
読むものが祈祷書しかない。これは、わが民族の恥ではないでしょ
うか？」。

„Kaj ni sramota, da ta narod, ki se uči brati po državni zapoveti,
ne bere drugega nego molitvenike, če ne spi v cerkvi?“ (S. 43)

そもそも新参者であるカチュールの長広舌に共感する者など現れず、聴
衆が激怒し始める。

「やつは、俺たちを馬鹿にしにきたのか?」、農夫が叫ぶ。
,Kaj nas je prišel zmerjat?«, je zaklical kmet. (Ebd.)

「一人で学んでろ!」、農夫が笑った。
,Sam se uči!«, se je zasmeljal kmet. (Ebd.)

グラスや椅子が飛び交い、つかみ合いが始まる。集会は、参加者たちの乱闘騒ぎに終わる。カチュールの所業は、神と信仰に対する冒とくで、善良なザポーリエ市民の間にいさかい、不和の種をまき、手本となるべき教師が、若者を誘惑したとして、更なる左遷の口実を与える。

カチュールは、自由な個人と民族の未来のためとはいえ、帝国や行政、カトリック権威を向こうにまわして、共同体との間に勝ち目のない戦いを繰り広げる。

2. スロヴェニアにおける自由主義運動

革命は、権力の所在で見れば、とどまるか失われるか、それだけに過ぎない。しかし、実際に革命が達成されれば、身分、職業、出身など関係なく、上を下への大騒ぎであり、略奪や暴行、破壊行為と、社会がまるごと混乱に陥る。良知力の『青きドナウの乱痴気』¹⁴は、1848年ウィーンの革命の喧騒を、克明に伝えている。

1848年2月、パリで起こった革命は、3月に入ってオーストリアに波及し、メッテルニヒ (Klemens Wenzel Nepomuk Lothar von Metternich, 1773-1859) が、命からがら亡命する。スロヴェニアでも3月、各地で民族的要求を掲げたデモが多発した。¹⁵この情勢下ハンガリー王国の代表たちは、皇帝フェルディナント (Ferdinand I, 1793-1875) に拝謁し、ハンガリー自治政府の樹立を求めて、認められている。帝国各地からも、同

¹⁴ 良知力『青きドナウの乱痴気 ウィーン 1848年』(平凡社、1993年)。

¹⁵ 柴宜弘編『バルカン史』(山川出版社、1998年) 付録 28 頁参照。

様の要求を携えた代表団が派遣され、スロヴェニアでは、クライン、ケルンテン、シュタイアーマルクなどの、スロヴェニア人居住地の統一、スロヴェニアの自治が、初めて要求として掲げられた。¹⁶

この要求は退けられてしまうものの、1849年12月、ケルンテン、クライン、シレジア、シュタイアーマルク、モラヴィア、ボヘミア、ティロール、フォアアールベルクに出された領邦法には、領邦に居住するすべての民族が対等な権利を有し、その民族性と言語を守り育てる、不可侵の権利を有することが規定された。年が明けて1850年1月には、同じくゲルツ、グラディスカ、イストリアにもこの規定が適用され、オーストリア帝国内部における民族の平等が、領邦法のなかに受け継がれる。

17

1866年、対プロイセン戦争に敗北したオーストリアは、ドイツ統一の主導権を失い、翌1867年、ハンガリー王国に大幅な自治を認め協調していくことで、帝国の危機を乗り越えようとした。さらに、皇帝フランツ・ヨーゼフ（Franz Joseph I, 1830-1916）は、ついに時代の趨勢に抗しきれず、彼の意に反する立憲主義体制を裁可し、帝国における民族の平等が憲法の中に位置づけられる。¹⁸憲法第19条には、次のように民族の平等が保障されている。

国家のすべての民族は、対等な権利を有する。またそれぞれの民族は、その民族性と言語を守り育てる、不可侵の権利を有する。

学校、官庁、公の生活において、州で日常使用されるすべての言語は、対等な権利を国家により承認される。

複数の民族が住む州においては、公的な教育機関は、次のように設置されなければならない。すなわちこれらの民族のどの民族も、他

¹⁶ 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』（岩波書店、1996年）20頁参照。

¹⁷ 大津留厚『【増補改訂】ハブスブルクの実験——多文化共存を目指して』（春風社、2007年）30頁参照。

¹⁸ 村山雅人『反ユダヤ主義 世紀末ウィーンの政治と文化』（講談社、1995年）14頁以下参照。

の民族の言語習得を強制されることなく、自らの言語による教育に必要な手段を手にする。

Alle Volksstämme des Staates sind gleichberechtigt, und jeder Volksstamm hat ein unverletzliches Recht auf Wahrung und Pflege seiner Nationalität und Sprache.

Die Gleichberechtigung aller landesüblichen Sprachen in Schule, Amt und öffentlichem Leben wird vom Staate anerkannt.

In den Ländern, in welchen mehrere Volksstämme wohnen, sollen die öffentlichen Unterrichtsanstalten derart eingerichtet sein, daß ohne Anwendung eines Zwanges zur Erlernung einer zweiten Landessprache jeder dieser Volksstämme die erforderlichen Mittel zur Ausbildung in seiner Sprache erhält.¹⁹

ツァンカルの描く、カチュールの自由主義的政治思想や言動は、この文脈においては奇異ではない。

対プロイセン戦争における敗北は、オーストリアの教育制度にも、その変革をもたらした。オーストリアでは、敗北の原因がまず、兵士の教育水準がプロイセンよりも低かったことにあると考えられた。²⁰また、脇田博文は背景に、19世紀後半の急速な産業化による、社会構造の変化を挙げている。「経済的な豊かさだけでなく、新たな社会環境に適応できる人材育成のために、つまり、読み書き能力をさほど必要としない農業労働者と違って、工場労働者や中間知識人には読み書きの能力が不可欠となるので、学校教育の普及・充実は国家にとって急務であった」²¹。

ケストラーによれば、ツァンカル『マルティン・カチュール』の具体

¹⁹ オーストリア共和国「連邦法情報システム」(RIS (Das Rechtsinformationssystem des Bundes))。Auf: <https://www.ris.bka.gv.at/GeltendeFassung.wxe?Abfrage=Bundesnormen&Gesetzesnummer=10000006> (2022年10月11日最終閲覧)

²⁰ 大津留厚、106頁参照。

²¹ 脇田博文「言語ナショナリズムの系譜：中欧多民族国家ハプスブルクの言語問題」(龍谷大学国際社会文化研究所『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第19号、2017年、237～260頁) 251頁。

的、歴史的出発点は、小学校の官営化を予定した、1868年の新しいオーストリア学校法と、1870年に行われた、宗教協約の一方向的な破棄にあるという。人事配置と小学校に対する監督は、それまで教会担当の案件だった。新法では、宗教の授業でさえ、精神的、政治的に高度に要注意な領域であるとして、官庁の明確な管理下に置かれた。当然ながら教会は、法的根拠をもってなされる権限の縮小に対して、ありとあらゆる手を使って対抗手段を講じる。²²

スロヴェニアでは、1892年に創立された、カトリック民族党 (Katoliška narodna stranka (Katholische Nationalpartei), 1892-1905) が、90年代以降クライン州議会において多数を保持している。ツェンカルがちょうど『マルティン・カチュール』を書いた1905年11月、それを母体にスロヴェニア人民党 (Slovenska ljudska stranka (Slovenische Volkspartei), 1905-1918) が創設され、1907年帝国議会第1回普通選挙では、スロヴェニア人の議席のほぼ4分の3を獲得、1908年には、新たな選挙制度のもとで、クライン州議会で絶対的多数を獲得するにいたる。ケストラの叙述に従えば、「これはとりわけ、小学校が事実上再び教会の管理下に戻ったことを意味し、すぐに、自由主義的志操を持った教員に対する、新聞、雑誌上での反対キャンペーン、カトリック党を支持する教員へは、税、および住宅補助の優遇措置となって現れた」²³。『マルティン・カチュール』が描いているのは、「学校が文化闘争の、最も重要な戦場の一つとなった時代の、教育者の災禍」²⁴でもある。

3. ユーモアと俯瞰

第2部、カチュールは左遷先ブラートニ・ドウの教師となる。彼の改革の努力に関心を示す者はやはり現れない。だが、カチュールはここで、次第に彼が「軽蔑し敵」(zaničljivo in sovražno, S. 110) と見なした人々

²² Vgl. Erwin Köstler: Nachwort. S. 222.

²³ Ebd. S. 226.

²⁴ Ebd. S. 222.

と打ち解けて話し、彼らの顔を「動物のよう」(Živalski, S. 110)には感じなくなっていく。カチュールは司祭と兄弟のように交わり、彼と収穫について、結婚式について、戦争について語り合う。

ブラートニ・ドウ最初のミサで、カチュールを紹介しながら、司祭が村人を前に説教している。先生には、乱暴な若造どもを理性的に取っ払ってもらいたい、必要ならきちんと、青くなるまで殴ってもらわないといけないし、おおかたその必要はいつもあって、この者たちは愚かゆえいずれにせよ何も学ぶことなどなく、少なくとも「杖」(palica, S. 69)に対する恐怖くらい持たせてやりたい、と。カチュールは、司祭に教えられた通り、ほどなく学校で子供たちを叱り飛ばし、「杖」を使い始める。カチュールはまた、このミサで見かけた、「肉づきのいい、官能的な」²⁵ 娘トンチュカと一夜をともにし、結婚している。二人はトーネ、フランツカ、ロイゼの、3人の子供を授かる。

「行こう！ブラートニ・ドウで、ほかに何をすればいいと言うんだ？生きてはいけない理由などあろうか？」。

„Pojdem! Kaj bi drugega v Blatnem dolu? Zakaj bi ne živel?“ (S.76)

10年以上もの年月が過ぎ、第3部、カチュールはようやく少しばかり華やいた村、ラーズィに転任がかなう。カチュールは新たな希望に満たされるものの、それもつかの間、ここではすっかり時代が変わってしまっている。今度は教育制度が自由主義化されており、彼の盲目的従順、隷属はもはや時代遅れとなっていた。「教杖と呪詛」(palica v šoli in kletev, S. 132)、ブラートニ・ドウで身につけたカチュールの荒っぽい、権威主義的教育「方法」(metoda, S. 131)は、ここでは受け入れられなかった。

ラーズィでカチュールは、ザポーリエ時代の同僚たちに再会する。彼

²⁵ Jörg Plath: Der Idealist und die Schwere. In: *Neue Zürcher Zeitung* vom 15. 08. 2006. Auf: <https://www.nzz.ch/article/E4lUF-ld.77215>, 15. 08. 2006. (2022年10月6日最終閲覧)

らの一人フェルヤンは、この新たな体制のなかで出世を遂げ、かつての「おべっか使い」(klečepłazec', S. 128) がいまや「進歩的教員の支柱」(steber naprednega učiteljstva', S. 131) であり、校長となっている。他方、心身ともに老いたカチュールは、「退職した革命家」(revolucionar v pokoju', S. 119)、「保守主義者」(konservativec', S. 136)、「おべっか使いのスパイ」(klečepłazec in špijon', S. 136) と揶揄され、嘲笑されている。

カチュールはついには、妻にまであからさまに不貞を働かれ、トーネとフランツカ、二人の子供は父親との間に距離を置くようになる。カチュールが妻トンチュカに、強烈な一撃を放つ。

「売女め！」。
,Vlačuga! (S. 149)

けれども、トンチュカにはトンチュカで、カチュールに対する鬱積した不満がある。

「あなたにとってあたしが何でもなかったって言うんだったら、何であたしにしたの？」。

,Če nisem bila zate, čemu si me pa vzel? (Ebd.)

「売女！あなたの言う通りね！あたしがいつそうじゃなかったって言うの？あなたにとってあたしが、嬉しがって、見て下さい、これが私の妻です、なんて人に見せられるような女だったことがあった？——夜の間はあなたはあたしを好いてくれたわ。でも夜が明けるとあなたはもうあたしのことなんか知らなかった…売女！そうよ！あなたのお望み通りにしただけよ！」。

ひどく息を切らし、目には涙をいっぱいのため、頬は赤みを帯びていた。

,Vlačuga! Prav si rekel! Kaj sem bila tebi kdaj kaj drugega? Kaj

sem ti bila kdaj žena, da bi me bil vesel in da bi me pozakal ljudem:
Glejte, to je moja žena? — Ponoči si me imel rad; ko je dan zazoril,
me nisi več poznal ... Vlačuga! Prav! Storila sem po tvoji volji!
Sopla je težko, oči so ji bile polne solz, na njenih licih so se
prikazale rdeče pege. (Ebd.)

カチュールは最後にもう一度、絶望的に反抗心を燃やしてみる。しかし、
体の弱い、最愛の末っ子ロイゼが息絶え、カチュールはついに、彼を生
に結びつけるものすべてを失ってしまう。

ケストラーは、「この小説は時代のドキュメントとして、教会支配ばかり
でなく、基本的にリベラリズムにも同様に距離を置く、作家の政治思
想を洞察する手掛かりを与える」²⁶と、小説の重要性を評価している。ま
た、それが強調されねばならない理由を、こう説明する。「なぜなら最近
再び、ツァンカルを信条告白的、伝記的次に矮小化しようとし、彼の
文学の最深の動機を母、故郷、神に対する関係にあると吹聴する、不安
を抱かせるほど分厚い論文の出版が相次いでいるからである」²⁷、と。ケ
ストラーの批判はさらに辛辣である。このやり口は、「肯定的に永遠の価
値について語り、一方で政治思想家ツァンカルをまったく無視した、あ
まりに時代遅れの手口である」²⁸。

1907年、ツァンカルは前述の帝国議会第1回普通選挙に、社会民主党
の候補者として立候補している。作家の個人的政治信条からすれば、ツ
ァンカルはカチュールに近いとも考えられる。だが、ケストラーの指摘
する通り、『マルティン・カチュール』の語り手は、司祭同様にカチュ
ールにも、寄り添いつつ、一定の距離を置いて語っている。この点、O・ホ
ッホヴァイスの論評にも、同様の指摘が見られる。この小説には、「感傷

²⁶ Erwin Köstler: Nachwort. S. 229.

²⁷ Ebd.

²⁸ Ebd.

や激情といったものの余地がほとんど残されておらず」²⁹、「カチュールの人生の転落が淡々と、まさに距離を置いて描かれている」³⁰。

ホッホヴァイスはまた、たとえばブラートニ・ドウの「ごつくばらんな、まったく非キリスト教的な」³¹司祭の描写に、「ユーモアやアイロニー」³²の要素を見出している。司祭の言動には、たしかに温かみを感じさせつつ、つかみどころのない、どこか可笑しみがにじむ。カチュールとトンチュカの、この小説最後のやりとりを見てみよう。トンチュカは、うだつが上がらない夫カチュールとの生活に長年耐え、とうとう愛想をつかして、不貞を働いている。とはいえ、彼女はそこであたかも人ではないのように、非難がましく描かれているわけではない。『マルティン・カチュール』は、時代の政治的文脈ばかりでなく、作者ツァンカルが慎重に人物たちを俯瞰して描く、目線の高さが感じられる小説となっている。

²⁹ Olga Hochweis: Eine Geschichte des Scheiterns. Auf: <https://www.deutschlandfunkkultur.de/eine-geschichte-des-scheiterns-100.html>, 15. 06. 2006. (2022年10月13日最終閲覧)

³⁰ Ebd.

³¹ Ebd.

³² Ebd.